



TITLE:

# 商君書徠民、算地兩篇よりみた秦朝權力の形成過程

AUTHOR(S):

好並, 隆司

---

CITATION:

好並, 隆司. 商君書徠民、算地兩篇よりみた秦朝權力の形成過程. 東洋史研究 1985, 44(1): 1-22

ISSUE DATE:

1985-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154106>

RIGHT:

# 東洋史研究

第四十四卷 第一號 昭和六十年六月發行

## 商君書徠民、算地兩篇よりみた秦朝權力の形成過程

好 並 隆 司

### 序

- I 徠民篇についての問題點
- II 算地篇の位置
- III 徠民、算地兩篇の臣の具象化
- IV 應侯范雎と蔡澤
- V 秦朝權力の性格變化
- VI 結 語

### 序

1 本稿で扱う『商君書』には眞偽問題があり、『商鞅評傳』<sup>(1)</sup>で陳啓天氏はその點を考證している。氏は宋代の黃震や『周氏涉筆』のいう僞書説はとらず、劉咸忻のいうように、大部分が秦以前の古書であり、幾つかの篇は商鞅の文章を基本にするか、その思想系列の後學によって増衍された著述、とする説を妥當としている。<sup>(2)</sup>

なかでも徠民篇は奏稿の型式をとっているが商鞅自身のものでない。成立時点はおよそ戰國期であるが、漢代になってから『商君書』に誤入したものと解している。この議論は胡適『中國古代哲學史』の「徠民篇は後人が誤って商君書の中に入れた他人の奏疏である」との見解をうけつぐものである。私見では徠民篇も大枠で商鞅の思想を越えるものでないの  
で、誤入という所まで主張する必要はないが、本篇がかかる見解を生ぜしめる對立點をもっていることは注意しておきたいと思う<sup>(3)</sup>。

さて、増淵龍夫氏は徠民篇のなかにみえる「反行兩登の計」に注目して、これを「郡縣民把握に内在する矛盾の解決策」であると解した<sup>(4)</sup>。これにたいし、西嶋定生氏は徠民に授爵されている點でこれを増淵氏のように、郡縣民と異なる公田民に比定することはできないと疑問を投げかけた<sup>(5)</sup>。氏によれば徠民篇は長平の戰鬪で秦民多數を失ったため徠民し、爵を授けて郡縣民として補充した策を記したものであるという。

ただ、そうするなら、徠民は當然の措置であり、秦の王府内で議論の餘地はないはずであるのに何故に徠民篇の臣と王吏の間に對立があるのであろうか。本稿ではかかる疑點をとおして『商君書』徠民と、その篇にみえる王吏の理論根據とおもわれる算地の兩篇がともに大枠として商子系列にありながらしかも政策論を異にする對立を示すことをみ、それが具體的な政治變化とどうかかわるか、さらに秦の君主權の確立とどのような關連をもつのかを論じてみたい。

## I 徠民篇についての問題點

序でみたように、この篇は奏稿形式をとっており、當時の秦朝の政策に何らかの提案をおこなったものである。上奏の主體は臣であり、論爭相手が王吏であることは篇全體を通讀すればはっきりする。問題はこの篇の臣の立脚點が商君書その他篇にみえる臣の言論とちがう點である。書の各篇において主語の位置にある臣を検索してみると、算地<sup>(第六)</sup>、錯法<sup>(第九)</sup>、徠民<sup>(第十五)</sup>、賞刑<sup>(第十七)</sup>、君臣<sup>(第二十三)</sup>、禁使<sup>(第二十四)</sup>、慎法<sup>(第二十五)</sup>の七篇があげられるが、それ

らにみえる臣の主張は、徠民篇を除いて商鞅變法の考えを原理的に踏襲しているとみられる。

すなわち、算地篇でみると、この臣は「談説に任じて功の寡い者」を批判し、「榮を論じ、功を擧げて以て之を任ず」というように功績を基準として人材を任用せよと主張している。錯法篇では明君が爵祿を授けるばあい、「用は必ず其の勞より出し、賞は必ず其の功に加う」るのであって、この篇でも臣は功勞を基準において爵・官を與えるという商鞅變法時の原則を主張している。賞刑篇においては「聖人は功を以て官を授け爵を予う、故に賢者は憂えず」とあり、この篇の臣の意見も前二者と同様であり、功によって官・爵を授けべきだと君主に上奏している。禁使篇の臣のばあいでも「賞は功に隨う」べきことを述べ、慎法篇の臣も「今、それ世俗の治者は法度を釋てて辯慧に任ぜざるなし、功力を後にして仁義を進む」と主張していて、世俗の治者を批判しているのだから、ここにみえる臣の立場は當然、功と勞を先行させる商鞅變法の原則によっている。

右のように徠民篇をのぞく各篇の臣の主張は功勞を基準として官・爵を授けるものとしている。周知のように『史記』商君列傳にみえる變法の令では、「軍功ある者は各々率を以て上爵を受く」<sup>(7)</sup>「力を本業に倭し、耕織して粟帛多きを致す者はその身を復す」とあって、軍功や農功のある者に爵・賞を與えるという原則が示されており、變法の令の綜括とみなされる部分には、「功ある者は顯榮し、功なき者は富むと雖も芬華する所なし」とあって、令文全體の趣旨がまさに功による君主の一元的支持を意圖するものであった。これを商鞅變法時の政策の原則とすれば、商君書<sup>(8)</sup>の先掲諸篇にみる臣の立場はこれを忠實に繼承しているとみてよいであろう。

しかるに、徠民篇ではこの臣の立場は他篇のそれとは異なるのである。その點を明らかにするために徠民篇の臣の主張する政策の大筋をみておく必要がある。

先王の制土分民の律では「地、方百里の場合、山陵が十分の一、藪澤が十分の一、谿谷流水が十分の一、都邑道路が十分の一、惡田が十分の二、良田が十分の四」という比率が理想の配分とされ、ここに五萬人の作夫を養える。所

が秦は方千里の地が五箇所と廣いの、穀物の地はその十分の二しかなく、人が少いので山川藪澤の財物は充分效用を盡していない。鄰の三晉では逆に土地が狭く民が多いため生活に苦しみ、田宅を求めている。こうした條件にありながら三晉の民が秦にこないのは王吏が爵を惜み、復を重んずる政策をとっているからだ。王吏の政策根據は「三晉が弱いのは復と爵を簡単に與えるからで、秦の強いのは復と爵を容易に與えないからだ」というのであるが、私（臣）の見解はちがう。民を苦しめてまで兵を強化する理由は敵を攻めて欲望を充さんがためであるが、敵を弱める方法とれば、結局、味方の兵を強くすることに歸結する。だから、三晉から招致する民に「三世代、復（除）を與え、十年間無税」の法を行えば山東の民は秦に向い、百萬の勞働力を創ることができる。一體、秦の悩みは出兵すると貧しくなり、農業に専念すると敵に休息を與える點である。だから秦民を兵事に、三晉の徠民を農事に専念させれば富・強兩成の效用が生ずる。然るに王は何故、愛爵・重復の舊政策を行なうのか。今、未墾の地に三晉の民を招致し、農業に専念させれば、敵を弱めると同時に穀物も得られる。これが「反行兩登の計」である。秦は引續く戦闘で失った民、農耕できぬ民が極めて多い。私（臣）の計は費用なしで晉を弱め、秦を強くする方途だ。<sup>(8)</sup>

右、徠民篇の臣の論旨の、その基礎はまず、秦地の地理的條件であり、これを前提に、人と田地と山林藪澤の三者の均衡が必要であるとした。當時、戦闘で失った人口の減少はあろうが、徠民篇の臣のいう秦と三晉の立地條件の相違は華軍・長平の鬪い以前からもあったのであり、従ってここでの何よりも重要な論點は先王の律による三者均衡といふ正當性の主張である。臣策の實現可能性は兩地の地理的條件が存在することを前提に、秦地への徠民策だけで右、先王の理想型が實現するといった所に根據をもっている。秦による徠民は三晉の兵力を削ることになり、戦わずして勝つのがこの計策の意圖であった。然るにこの實施にあたつては現行の王吏の愛爵・重復策が障害となるので、秦王はそれを廢し、徠民に「三世代の復除と十年の免租」<sup>(10)</sup>を與えよと云っているのである。

徠民篇にはまた、念入りに臣が自策を例示する部分が示されている。それが東郭敞の插話である。

齊人に東郭敝なる者あり、猶多願、萬金を有つを願う。その徒、調を請う。與えずして曰く、吾、將に以て封を求めんとす。その徒、怒りて去り宋にゆく。曰く此れ愛むことに益なし。故にこれに與うるの利に如かざるなり。いま晉に民あり。秦その復を愛む。此の愛、其の有に非ず。以て其の有を失うなり。豈、東郭敝の愛の其の有に非ずして、以て其の徒を亡うに異ならんや。

ここでは、功を豫想して賞賜を先に與えるか、功績をあげてのちに賞賜を與えるかが問題となっている。徠民篇の臣は前者をとるべきだと主張しているのである。功勞をあげて後、その量に應じて上爵を得るのが商鞅變法での授賞原則であったが、ここにみる徠民篇の臣の提案は「先・後」という點で全く異なる方法を秦王に勧めている。従つて、既にみた他の六篇の臣の立場とは論旨が違つていのである。徠民篇が他篇に比して、些か特異と考えたのは、奏稿の主體たる臣の思想が商鞅の原則と違ふ點であり、徠民篇の臣に批判される王吏のほうが商鞅變法時の政策原則に忠實であつたからである。

ところで、この徠民篇の臣と王吏との思想的立場の相違はどの程度のものであるのか。史記商君列傳の孝公と商鞅の對面においてなされたという説話は<sup>(12)</sup>その解明の緒になるであらう。鞅は孝公の寵臣景監の斡旋で對面し、四度の對話をかわしたという。一度目は「吾、公に説くに帝道を以てし、その志、開悟せず」、二度目は「吾、公に説くに王道を以てし、未だ入らざるなり」である。三、四度目の對話内容はおなじであるが、前者で「吾、公に説くに霸道を以てす。その意、之を用いんと欲す」とあり、後者では「與に語り、自ら刻の席より前む。語ること數日厭わず」と孝公を大いに喜ばせた。とある。景監の問いに答えて、鞅はまた、

吾、君に説くに帝王の道を以て三代に比す。而して君曰く、久遠にして吾待つ能わず。且つ賢君なる者、各々その身の名を天下に顯わすに及んで、安んぞよく邑々として數十年を待ち、以て帝王と成らんやと。故に吾、彊國の術を以て君を説き、君大いにこれを説ぶのみ。然れどもまた、徳を殷、周に比するを以てすること難し。<sup>(13)</sup>

と述べる。すなわち、右の引用文によれば、一、二度目の對話をまとめて「帝王の道」とし、それが「久遠」であつて孝公の探るところとならず、「疆國の術」すなわち三、四度目の對話での「霸道」を軼に委任したというのである。商鞅は本來「帝王の道」を否定することなく、具體的には二度目に述べた王道を、霸道を説く前提として論じている。霸道の價値は軼によつて「その徳は殷、周に比し難」と認識されるものであつて、あくまで次善の策であつた。秦ではその次善の策から始めて帝王道に達する道筋を商鞅は採つたとみることができ、臣が右の帝王道をとるものであれば、兩者の本質は共通するが、しかもなお商鞅學派の左右兩翼の分岐とみなしてよいであらう。

商鞅以來とつてきた強兵策が他國との戰鬪激化の段階に達すると、民は徵兵によつて農時を失ひ、富國策は戰鬪活動との間に矛盾を生んだ。その打開の方途として、三晉の民の導入による農事専念と秦民の戰鬪専念部分に二分するといふ分業的發想が、徠民篇の臣によつて提起されたのである。既述のように、増淵氏はこれを「郡縣民把握に内在する矛盾」と<sup>14</sup>と把える。しかしそれは富國強兵策に内在する矛盾ではあつても、郡縣民把握という點に變化が生ずるわけではない。故秦の民<sup>15</sup>戰鬪、三晉の民<sup>16</sup>農耕と分けられても、雙方をあわせ支配する秦の政府からすると、戰鬪、農耕は從來同様に一元的に繼續できる。ただ個々の農民の立場からいうと、農と戰とが分けられ、それに専念せしめられる點で、自由な選擇の餘地が狭ばまつたにはちがいない。徠民篇の臣はこの策を「地廣人稀」の秦國を先王の律に則り、土地と人間の量的に均衡のとれた國家とする點で王道の實現と稱し、霸道<sup>17</sup>變法令の段階をより一層すすめたものと考えている。そうみると、臣はまさしく商鞅が孝公に語つた挿話の、霸道から帝王道への途をたどつているとみられ、その點で商鞅思想の大枠はなお維持されている。徠民は「三世の復と十年の免租」終了の後には秦民と同様、郡縣民化するであらうから、この分業化は増淵氏のいう郡縣民把握原理の變質を示すものではない。

では、挿話の「霸道から王道」への變化での違いはどこにあるのか。それは功を擧げて後、賞を授けるという商鞅變法の原理が徠民の功績を豫定して、「復と免稅」の賞を與えるという策によつて重大な變更を蒙つてゐる點である。この施

策を可能にしたのは如何なる根據にもとづくかをみれば、それは修權篇（第十四）に、

國の治むる所以の者三。一に曰く法、二に曰く信、三に曰く權。法は君臣の共に操る所なり。信は君臣の共に立つる所なり、權は君の獨り制する所なり。

とある「三」の權の發展・確立化にあると思われる。法と信とは變法時に定められたが、權はなお王族によって拘束を受けていたが、修權篇の段階、乃ち、「還是戰國末期法家者流掇餘論所成」（「商鞅評傳」<sup>15</sup>）すなわち、秦王國晩期に於て、君主の權が確立しはじめ、君主が恣意的に功を豫定して、賞を先予することが可能となつてきたのである。

## II 算地篇の位置

前章で徠民篇の主體である臣が主張したのは故秦民<sup>16</sup>戰鬪、三晉の徠民<sup>17</sup>農耕というように、分業すると同時に徠民にたいして將來の功績を豫定して賞を先予することであつた。これは商鞅變法の霸道的原則を動搖させる措置であつた。そして提案者たる臣が批判の對象としたのは右の原則に忠實な王吏であると指摘したが、この王吏の立場を示すものが商君書徠民篇と異なる篇にみえないであらうか。筆者はそれを商君書算地篇に比定したい。この篇をみると徠民篇と同様ま

ず、國を爲め地に任ずる者は山林什一におり、藪澤は什一におり、谿谷流水は什一におり、都邑蹊道は什四におる。これ先（王）の正律なり。

と記す。この文章の「都邑蹊道什四」はおそらく什一の誤りであり、惡田と良田を加えた率が什六と補訂さるべきことは朱師轍<sup>16</sup>の注記するとおりである。そうであれば、みぎ文章にみえる「先王の正律」とはまさに徠民篇の「先王の制土分民の律」とおなじ内容を指す。この正律を標準として秦地の現状を

故に國を爲むるに田を分つ數が小さく、五百畝を配分し、そこから一役を出すにすぎない。これは土地の力を盡して



いるとはいえない。そして方百里で戦卒萬人を出すというのは数が少い。

と分析する。秦地は田土が廣く人閒が少いので、先王の律の五分の一しか効率があがらないというのである。ここまでの算地篇の臣の議論はまさしく徠民篇の臣のそれと同じである。後者の場合はこの條件を前提として、すでにみたように三晉の地理的特徴を秦國の土地・人閒の在りかたと對比することによって、招來すべき三晉の民に復と免税の特典を與えるよう提案していた。そして彼らを秦の廣大な未墾地に置いて開墾に専念させ、農收をあげる説を主張していた。これにたいし算地篇の臣ではどうか。算地篇をみるとわかるように、

臣ゆえに世主の爲に之を患う。其れ地大にして墾せざるは地なきに同じ。民衆くして用いざるは民なきに同じ。故に國を爲めるの數は務めて墾草にあり。用兵の道は務めて壹賞にあり。私利、外に塞げば民、農に屬するに務む。<sup>(17)</sup>

と篇の論旨がこの部分から徠民篇の臣説とちがった方向に進められる。すなわち、秦の曠野を開墾する點は徠民篇と全くちがわれないが、その具體的方法は、三晉の徠民に依據するのではなく、秦の故民の開墾に求めている。しかもそれは用兵策と並行して論ぜられているのである。徠民篇の臣の策は農耕と戰鬪の分業・人員不足を補充するため三晉から徠民する點に核心があったのであるが、算地篇の臣の策は開墾のために秦民がより一層、農務に専念すること。徠民篇の臣では秦の内政には觸れず、外部の三晉から勞働力を導入して農事に充てるよう考えていたが、算地篇の臣では「民衆くして用いざる」秦の内政の状況を批判し、秦民を使用することを求めている。算地篇ではまた次のようにのべる。

今、世主、地を辟き民を治めんと欲して、數を審かにせず。臣その事を盡さんと欲して術を立てず。故に國に不服の民あり。主に不令の臣あり。故に聖人の國を爲むるや、入りて民をして以て農に屬さしめ、出でて民をして戰を計らしむ……中略……利、地にあれば民、力を盡し、名、戦いにあれば民、死を致す。……中略……今は則ち然らず。世主の務を加うる所の者はみな國の急に非ず……

と。すなわち算地篇の臣は現在、秦では君臣のあいだの術數が動搖しているため、不服の民、不令の臣が多くなった。本

來、聖人の統治というのは農戰一元であるのにそれが充分に實行されていないと批判している。そして右の原則が行なわれていないので「五民、國用に加われば則ち田荒れて兵弱し」と五民なる者が生じた。算地篇ではそれは談説、技藝、商賈の各士及び處士、勇士である。墾令篇では「五民なる者、境内に生ぜずば則ち草必ず墾せん」とあり、編急、很剛、怠惰、費資、巧諛なる各民にあてる。雙方の篇で表現はちがうけれども五民とは法に従わず、農務につとめず、外交、商業など游業に向う民であり、農戰一元の秦の原則から外れた人々である。農戰篇では詩書を學んで外交に従事する人、商人、技藝の人をあげて彼らは「皆以て農戰を避く」とあり、その存在が一元性を損うとみなされる。また斬令篇では、「六蝨用いざれば則ち兵民みな競勸して主の用を爲すを樂しむ」とあって、六種の害虫が兵民一元化を妨げ「君主の用を塞ぐ」と批判している。その六蝨とは「禮樂、詩書、修善、孝弟、誠信、貞廉、仁義、非兵、羞戰」である。<sup>(18)</sup>すなわち儒家の道德、墨家の非戰等の思想を批判している。かかる五民、六蝨が生れると民は農・戰以外の方法で爵賞を得ようとするから、國家政策の基本が動搖すると論じているのである。

このように算地篇の臣は農戰一元の商鞅的政策原則が現在の秦國では弛緩しているばかりでなく、君主も亦、農戰以外の方法で臣・民を登用している。こうした現状を改めて民を本來の原點にたち返らすことが緊要と論じているのである。それゆえ、算地篇の臣は徠民篇の臣のように農戰一元の原理が外征にさいして生じた矛盾を秦の當面する最大の問題とはみず、むしろ内政における商鞅の原則の弛緩こそが游民を生むので、それが正さるべき中心課題だとみていたことになる。

### III 徠民、算地兩篇の具象化

すでにのべたように、徠民篇は長平の戦いの後、しばらくした時期に作成されたものであった。<sup>(19)</sup>既述したところによつて算地篇の臣の思想は大凡、徠民篇の王吏に該當するとおもわれ、陳啓天氏の考證を参照すれば右兩篇はほぼ同時期の政治家の意見とみてよいであらう。そうとすれば昭襄王の晩期において、秦の王廷内では一體、いかなる政治的状況が存在

していたのであろうか。

秦の昭襄王が即位したとき、その推戴者は昭王の母、宣太后の弟に當る魏冉であつた。彼は先代武王の死後「諸弟爭立」のなかで獨り昭王を推し、季君の反亂を抑えて昭王の位置を安定させたという。<sup>(20)</sup>以後、六國との戦鬭が激化するが、その際有力な將軍を必要とした。時に魏冉が登用したのがかの有名な白起に外ならない。穰侯列傳に「白起なる者は穰侯の任擧する所なり。相善し」とみえる。白起は彼の要望にこたえて韓・魏を攻め、昭王二十八年には楚を攻めて南郡を設置する戦果をあげる。この兩者が相俟つて秦の霸道をすすめるのである。穰侯列傳の實に、

秦の、東地を益し諸侯を弱め、嘗て帝を天下に稱し、天下みな西郷して稽首する所以の者は穰侯の功なり。

とある。この霸道の推進は同時に魏冉の私的利益にも密接につながっていた。たとえば昭王三十二年、魏を攻めて大梁を包圍した記事が穰侯列傳にみえる。そこに次のようにある。

かつ君の地を得る、豈必しも兵を以てせんや。晉國を割くに秦兵攻めざれば、魏必ず絳、安邑を效さん。また陶のためにも兩道を開く。

陶は魏冉の領地であり、魏と和睦すれば陶地の便宜となるという利益が伴つたのである。「是において穰侯の富、王室よりも富む<sup>(21)</sup>」とあるのは霸道をすすめるなかで次第に私權をたてていった穰侯のありようを明確に表現している。ここにみえる霸道は商鞅變法の功賞原理を踏むものであるが、それは功が多ければ賞も増すのであって、秦の霸業の擴張と並行して穰侯の私權もまた擴大していく必然性をもっていた。昭王三十六年、穰侯は齊を伐ち、剛・壽の邑を奪いこれを自己の封地に併せようとした。その際、魏の范雎が入秦して穰侯の政策を批判する。すなわち「秦、安んぞ王を得たる、秦獨り太后・穰侯あるのみ」(史記范雎・蔡澤列傳)とある。昭王が壯年に達し、親政の意志のあるのをみて雎は王に進言したものであろう。豫想どおり昭王は范雎を客卿に拔擢して共に兵事を計り「卒に范雎の謀を聽」く(前掲書、同傳)ようになる。右の経緯からみると太后・穰侯・白起の「政・軍」體制は昭王三十六年に到つて衰える徴候がみられ、やがて昭王・

范雎體制に轉化していくのである。四十一年には「范雎、既にして秦に相たり」（史記范雎・蔡澤列傳）と權力の座につき、四十二年九月には穰侯が引退、同十月に宣太后が死去するに至って完全に政權が交替する。

さて、ここにみる范雎の基本的な政治理念はいかなるものであろうか。昭王との初對面で雎は次のようにいう。

臣聞けり。昔、呂尙の文王に遇うや、身、漁夫たり…。已に説き立ちて太師となる…。故に文王遂に功を呂尙に收め、卒に天下に王たり。郷に文王をして呂尙を疏んぜしめ深言を與えざらしめば、是れ周、天子の徳なく、文、武ともに

其の王業を成すなし。（史記范雎・蔡澤列傳）

みぎ傍點の部分は戰國策では「卒に天下を擅にし身は立ちて帝王となる」とある。また、「秦は攻防によい地形をもち、民は公戰に勇で王者の民であり、霸業を致すべきである」とあつて王者たる君主を介して霸道をおこなうこと、換言すれば帝王の道を指示していることになる。その立場からみると、丞相穰侯は閉關して出撃せず、却つて遠い齊國を伐とうという拙策をとっている。従つて雎は「いま與國の親しまざるをみて、人の國を越え攻めるは可ならんか。其れ計において疏なり」と非難し、「王、遠交して近攻するにしかず」という方針を示す。<sup>(22)</sup>具體的には、

昭王曰く……魏に親しむ奈何ぞと。對えて曰く、王、詞を卑しくし幣を重くして以て之に事えよ。不可なれば則ち、地を割いて之に賂せよ。不可なれば因つて兵を擧げて之を伐て。王曰く、寡人敬んで命を聞かん。<sup>(23)</sup>

とのべて魏との和親を目的として、征伐をその手段とみなしている。従つて穰侯・白起による外征とはその趣旨を異にしているのである。

秦、韓を攻め陘を圍む。范雎、秦の昭王に謂いて曰く、人を攻める者あり。地を攻める者あり。穰侯十たび魏を攻めて傷けるを得ざるは秦弱く、魏強きに非ざるなり。その攻める所は地なり。地は人主の甚だ愛する所なり。人主は人臣の樂しみて死を爲す所なり。人主の愛する所を攻め、死を樂しむ者と闘う。故に十攻して勝つ能わざるなり。今、王まさに韓を攻め陘を圍む。臣願くは王の獨り其の地を攻めることなくして、其の人を攻めよ。（戰國策卷五 秦）

とあるのは地を攻める穰侯の策に對置して、人を攻める方法が提起され、君主の德を介した霸道が想定されている。

このような秦の政策轉換が討齊の昭王三十六年を機に開始されるが、穰侯の方針をとる白起は依然、從來どおり諸國領に地を併せる戰鬪行動を續けていた。四十一年穰侯の失脚後も變更されることなく問題の昭王四十七年の事態を迎えることになる。先に同年七月、趙との戦いに先立ち（昭）王自ら河内にゆき、民爵各一級を賜う<sup>(24)</sup>とあるように、王が民に爵を授けている。これはまだ功のない民に賞を先與しているわけで商鞅の授爵原則の變更であり、王の恣意による恩德の下賜である。既にのべた「權」の伸長といえよう。

同年九月に著名な長平の戦いがあつた。秦の白起は趙軍を破つて「卒四十萬人、武安君に降る。武安君計りて曰く、前に秦すでに上黨を拔く。上黨の民、秦たるを樂しまずして、趙に歸す。趙卒反覆、盡く之を殺すに非ずんば恐らく亂を爲さん。乃ち詐を挾んで盡く之を坑殺す……前後、斬首虜四十五萬人。趙人大いに震う」（史記白起・王翦列傳）とあるように降卒を大量坑殺する。この行爲はすでにみたように、德を布き和親策を基調とする應侯范雎の方針と眞向うから對立するものであつた。

この虐殺事件にかかわる白起と范雎の關係について蘇轍は、

予、太史公の白起傳を讀み、秦の再び邯鄲を攻めるや、起と范雎怨あり。病と稱して行かず、以て其軀を亡う。慨然として歎じて曰く起は武夫を以て信を屈する所なし。而して游談の士に困しむ。起をして勉強一行せしむれば兵未だ必しも敗れずして、死を免れしならん……。〈古史卷四四、白起〉

と述べる。すなわち起は武弁にすぎず、學問に缺けていたことが悲劇的死につながつたものである。別に『十七史商榷』において王鳴盛は、

白起、趙を長平に破り詐りて其卒四十萬を坑す。自ら不世の功を建つと謂う。孰ぞ知らん、范雎已にその後を伺い、傾けて之を殺す。天道は殺を惡み、還を好む。豈、懼るべからざらんや。雎の若きはまた小人の尤なり。それ起、秦

に在りて則ち勞臣と謂うべし。睢その己に偏るを惡み、必ず之を死地に置いて後快しとす。蓋し古より權臣、人主の威柄を竊まんと欲し、良將在りと雖も外にあつて務めて其の肘を掣し成功を得ざらしむ。甚だしきは且によつて之を誅翦す。其れただ一身の富貴の爲に計りて人主の爲の計をせざることを此の如き者あり<sup>(25)</sup>。

と述べ功勞の臣としての白起を評價しながらも、四十萬の卒を坑殺した事については「天道は殺を惡」む見地から起による虐殺を批判している。

以上、穰侯・白起は軍功を中心とする霸道方針をとり、范雎は君主の德を介しての霸道<sup>(26)</sup>帝王道を行わんとしている。この點から更めて商君書の兩篇をみると、算地篇の臣は變法の原則に忠實な穰侯の系列に立ち、徠民篇の臣は右の范雎やその後<sup>(26)</sup>に權力の座に就いた蔡澤らの立場に近接していると推測される。

#### IV 應侯范雎と蔡澤

長平の戰を経て邯鄲を包圍した昭王五十年に「(范雎) 已にして武安君白起と隙あり<sup>(27)</sup>」とあり、白起列傳では、韓、趙兩國が秦の攻撃を恐れ、蘇代を使者として應侯を説き、白起の侵略を止めようとしたことが記される。すなわち、

上黨の民、皆反りて趙となる。天下、秦民たるの日久しきを樂しまず。いま趙を亡ぼし北地は燕に入り、東地は齊に入り、南地は韓・魏に入らん。則ち君の得る所の民、幾何人も亡し。故に因りて之を割するに如かず。以て武安君の功と爲す勿れ<sup>(28)</sup>。

とある。この説得を范雎は聞きいれ、昭王に上奏して六城を割讓する條件で趙と和睦し、四十八年正月兵を引く決定をした。ために「武安君之を聞き是に由つて應侯と隙あり<sup>(29)</sup>」という。しかし徐孚遠の注によれば「武安君は穰侯の任ずる所、應侯、穰侯に代つて相たり。二人、故に隙あり」と論ずるが、路線の違いを示唆するこの見解が妥當である。ともかくもこの趙との和議が兩者の不和を決定付けたのは確かである。商鞅變法的霸道から王道を介して帝王道へ移行する状況を白

起の死が象徴している。この移行が始まるや急テンポで政治變化が進展する。應侯の推舉した鄭安平が趙と戦つて敗れ、河東守王稽も諸侯との交際嫌疑で處刑され、<sup>(31)</sup>范雎に連坐の懼れが生じた。<sup>(32)</sup>この處置について『史記』と『戰國策』では昭王のそれに對應する姿勢の記述に違いがある。前者では、

應侯薬を席き罪を請う。秦之法、人を任じ、任ずる所善からざる者各、其罪を以て之を罪す。是に於て應侯の罪當に三族を收む。秦昭王、應侯の意を傷くを恐れ……日益に厚くし以て其意に適うに順う。

とあり、後者では、

秦、邯鄲を攻め十七月下らず……王稽聽かず、軍吏窮る。果して王稽を惡み、杜摯以て反す。秦王大に怒り兼ねて范雎を誅せんと欲す。范雎曰く……王、臣を羈旅の中に擧げ職事せしむ。天下皆臣の身、王の擧と與にするを聞けり……是れ王の過擧、天下に顯れん……遂に殺さずして善く之を遇す。

とある。君主權の伸長という視點からすると『戰國策』の描寫がリアルである。この君臣間の矛盾を衝いて入秦したのが蔡澤であるが、その論に、

仁を身につけ義を守り、道を行い、徳を施し……世人は三者の功を讃えるが徳ありとはせず……白起も……帝業を成したが功成つて劍を賜わる。<sup>(33)</sup>

とあり 商鞅・吳起・大夫種・白起の四者を功業の故に評價しながら徳を伴わぬ故に結末は悲劇であつたという。又、大功は禍の本であるから身を退ける態度が必要だ、四者は「功成つて去らざりしたため禍が及んだ」とも云っている。これら論說の思想的根據は、「物盛んなれば則ち衰えるは天地の常數なり。進退盈縮、時と變化するは聖人の常道なり」「飛龍の天にあるは、大人を見るに利し」のように『易經』<sup>(34)</sup>を引いて述べる部分と、『論語』『書經』を引く部分とがある。徳を備えるとともに身を退く姿勢を説くことは君主權の絶對性を容認するとともに、その逆鱗に觸れぬ官僚の姿勢を求めるものといえるであらう。<sup>(35)</sup>

右のように穰侯・應侯・蔡澤という各丞相の在りかたの違いに示された秦國の政治の推移をみると、商鞅變法的霸道から商鞅插話にみる王道を介して帝王道へと變化していく道程が大凡察知できる。商君書徠民篇の王吏は右の霸道を承ける穰侯系の立場にあり、同篇の臣はそれを批判する應侯系もしくは蔡澤系の流れに立つことを、既に豫想してきたが、この徠民篇の臣がその何れの側に屬するとみるのが妥當であるかを推論してみよう。

まず、その解決の手懸りとして徠民篇の

(1) 周軍の勝、華軍の勝、秦、斬首して東に之く。

或は、

(2) 且つ周軍の勝、華軍の勝、長平の勝、秦の民を失う所の者は幾何ぞ。

とある文章があげられる。(1)でいうと、戰國策に周軍の勝はみられないが、(2)では商君書のどの版本にもこの順序で傍點文句は存在する。従って周軍の勝を無視することはできない。華軍の勝とは朱師轍の注釋によると、昭襄王の三十三年、客卿の胡傷が魏を攻め、芒卯を華陽で破った戦いを指すものという。『商君書新注』、『評注』では昭襄王三十四年の華陽の戦役と注釋している。ところで周軍の勝は『商君書校釋』<sup>(39)</sup>には昭襄王五十二年、西周を占領する戦いと解釋し、『商君書新注』、同『評注』、同『注譯』<sup>(40)</sup>では昭襄王五十一年の秦が周を滅した戦役とみなし、年数は一年ちがっているが、共におなじ戦役に比定していることは確かである。省みて長平の勝というのは昭襄王四十七年であるから、以上、三つの戦役の商君書徠民篇における記述順序は不整合といえよう。

既述の諸注釋本の解釋以外でみると、『商君書經濟論述選注』<sup>(41)</sup>では、周軍の勝とはBC二九三(昭襄王十六年)、韓・魏・周が秦を連合して攻撃するにあたり、將軍白起が伊闕において反撃し、三國連合軍をうち破った戦いであると解している。敘述の順序からいうとこの注釋が整合的ではある。しかし、史記白起列傳に記す所は「昭王十四年、白起は左更の位に進み、韓・魏を攻め、伊闕で戦って、首を取ることに二十四萬。その上(韓の)將軍公孫喜を捕え、五つの城を陥入れた」



であつて、周については記述がない。それ故この戦役を周軍の勝と稱するのはやはり不適當であり、徠民篇の順序について問題は残るけれども、多くの注釋者の云うように昭襄王五十一年、西周を滅した戦いとみる説を採りたい。徠民篇はこの後すぐに成立したものであり、蔡澤が秦に入り應侯を丞相位から斥け「昭王新たに蔡澤の計畫を説ぶ」というこのプランこそが徠民篇となつた上奏文であつたとみてよいのではなからうか。

## V 秦朝權力の性格變化

商鞅の政策の基本原理は功勞を基準として爵を授け、その身分によつて社會的位置を定めるところにあつた。この原理を純粹に行なえば君主の位置も必しも絶對的たりえないはずである。戰國策に「孝公、之を行なうこと八年、疾して且に起たず、商君に傳えんと欲す。商君、辭して受けず」と死にさいして君主の位を商鞅に譲ろうとした挿話がみえるのも、事實か否かは別にして、原理をそのまま行なえば、そういうこともありうるという例證になりえよう。

孝公は鞅の方針を實施したが、當時の秦國の實狀は様々の抵抗の源が存在していた。それは「宗室・貴戚・大臣」と呼稱される上層部の反撥によつて示されている。その點は趙良との對話によつてもうかがうことができる。とりわけ「父兄を敬して有徳を尊ぶ」行動によつて「少らく安んず」る状態が克ちとれると良のいうことからみて、村落共同體を基礎とする宗室以下の勢力がなお解體できなかった様相を察することができる。商鞅の權力の基礎は「分異の民」を中心とする四十一縣であつたが、この上に立つ孝公の權力はなお霸道を行なうには不充分であつた。

惠王の時代、張儀が周を攻め「天子を挾んで」天下に號令する霸道を主張したが、司馬錯は「王者たらん者は其の徳を博くするに務める」富國策をとつて對立した。<sup>(46)</sup>富國強兵策が共に狙いであるが、富國か強兵かのいずれをこの時點でとるかで議論が分岐した。

武王期でみると、左右丞相制が成立して、宗室出身の樗里疾と客臣甘茂が充てられていた。君主と宗室・貴戚の兩存が

(47)  
計られているのである。この意味で恵王、武王兩期には質的變化はないと考えてよい。こうした状況下で昭襄王の即位が實現した。この王位繼承には魏冉が力を持っていたことは先述したとおりであるが、二年には庶長壯が「大臣・諸侯・公子」とともに反亂して誅殺されている。宗族・貴戚が昭王初に削弱され、宣太后系だけで王を擁する形となった。やがて昭王十二年に穰侯魏冉が丞相となり、以後「三相三免」(48)と變化はありながら、長期にわたって政治力を行使した。この穰侯政權の評価については『容齋隨筆』に「魏冉罪大」と題し、秦の滅亡の遠因は彼が「挾詐失信」であったためだと云っている。具體的には、

商於六百里を以て楚に啖わせ、齊と絶たしめ、繼いで楚の懷王と約して武關に入り、辱しめて藩臣と爲す。竟に之を留めて死に至らしめ、その喪歸に及んで、楚人みな之を憐み、親戚を悲しむ如し。諸侯是に由り、秦を直とせず……此の謀りし者は張儀、魏冉なり。儀の惡なるは言を待たず。冉の計は頗る隱なり。故に士君子の誅する所とならず。と云つて筆誅を加えている。他方、『資治通鑑』卷五の贊において、司馬光は逆に、

穰侯、昭王を援立して、其の災害を除き、白起を薦めて將となし、南、郿・郿をとり、東、地を齊に屬し、天下の諸侯をして、稽首して秦に事えしめ、秦、益々強大なる者は穰侯の功なり。

と霸道遂行者としての穰侯に高い評價を與えている。もつとも、

その専恣、驕貪、賈を以てすると雖も禍また未だ盡く至らざるは范雎の言の如し。雎の如き者はまたよく秦のために忠なるに非ず。謀は直に穰侯の處を得んと欲するなり。故に其の吭を捻えて、之を奪うのみ。

と穰侯が私利を求めたことを批判しているが、范雎も奪位の謀略者而非難することによって、穰侯の評価をおとしめてはいないのである。すでにみたように穰侯は白起を用いて秦の霸道をすすめるとともに、私領の増加を計っていたが、霸道という點では、昭王に西帝を名のらせようとしたのがその例であり、商鞅の孝公對話の挿話にみえる「帝王の道」を霸道を押しとおして達成しようとしていたことがわかる。その意味で洪邁と司馬光の穰侯評價では後者が妥當な見かたのよう

におもわれる。

昭王が壯年になるに及んで、宣太后系の専制を排除し、親政の意志が示された。この龜裂状況に介入したのが范雎であった。「秦は獨り太后・穰侯あるのみ」<sup>(49)</sup>と批判して、君權の確立をめざした范雎は穰侯の政策を、

群臣その位に當る莫く、今に至るも閉關十五年、敢て兵を山東に窺わず。是れ穰侯、秦のために不忠を謀り、大王の計、失う所あり。

と批判、攻撃した。錢大昕の注によると、范雎の入秦は昭王の三十六年であり、この時、白起は趙・魏及び楚をしばしば討伐しており、穰侯も綱・壽二邑を攻撃していた。従つて、「閉關十五年」の文句には疑點がある。故に戰國策の文句との對比によつて、「至今閉關」を「今反閉關」と改め、「十五年」は削除すべきだと錢氏はいう。そしてこれに續いて、

夫れ穰侯は韓・魏を越えて、齊の綱・壽を攻めるは計に非ざるなり……臣、意うに王の計は少く師を出さんと欲すれば、韓・魏の兵を悉くするは則ち不義なり。今、與國の親しまざるをみるや、人の國を越えて攻む、可ならんか。それ計において疏なり……。王、遠交して近攻するにしかず。寸を得れば則ち王の寸なり。尺を得ればまた王の尺なり。今、此を釋てて遠攻す。また繆りならずや。……昭王曰く、吾、魏に親しまんと欲すること久し。而して魏は多變の國なり。寡人、親しむ能わず。請問す、魏に親しむ奈何ぞと。對えて曰く、王詞を卑しくし幣を重くして以て之に事えよ。不可なれば則ち、地を割いて之に賂せよ、不可なれば因つて兵を擧げて之を伐て。<sup>(50)</sup>

というのを参照すると、魏・韓の鄰國を越えて齊を攻めるのを非難し、遠交近攻策をとることが秦國の利益と述べていることがわかる。そして、親魏の爲にはまず近攻の必要ありとしているのである。

このようにみると、穰侯魏冉から應侯范雎への權力移行の意味は昭王親政、宣太后系列排除であり、君主權を抑制する王室の「宗族・貴戚」層の排除であり、霸道路線の内政面における進展と考えられる。<sup>(51)</sup>

そうすると、白起の霸道推進のための外國侵略策は范雎と對立しないはずであるが、兩者に強い確執の生じたのは何故

であらうか。おもうにその直接の契機は蘇代の游説であつた。<sup>(52)</sup>彼は白起が以後も戦いを續ければ戦功が累積して爵・官が范雎を越えるという趣旨を述べているのである。この段階に至つて、商鞅變法時の功賞一元論は限界點に達したというべきであらう。その回避の方法が蔡澤のいう「自讓」或は德義の尊重という發想なのであつた。白起の死は商鞅的霸道の終焉の具體的象徴である。

## VI 結 語

秦朝における君主權力の伸長は穆公以來、とりわけ商鞅の變法令において一段とめざましい發展があり、功勞一元による身分編成は秦國に富國強兵の契機をもたらした。商鞅の急激な政策遂行は中途での挫折を餘儀なくされるが、それは君主權と宗室・貴戚の並存政策として調整されつつ、彼の功勞一元の原則的立場は變更されなかつた。これを本稿では、商鞅の孝公への提言説話にみえる霸道の政策として把えてきた。その基礎條件は一方での君主による小農民の直接支配と貴戚・大臣層の基盤である宗族的共同體との並存且つ競合の二重體制である。

この商鞅變法的霸道政策の變更は蔡澤執政期に顯著である。功を前提として授爵した商鞅の原則を變じ、徠民に授爵して農收を期待する政策への推轉がみられた。換言すれば、士の戦闘活動に對する授爵が、君主の恩德として行なわれる民の農業活動への授爵にまで展開したともいえる。それは絕對化を志向する君主の小農民支配の發展と照應する。秦始皇四年十月庚寅にみえる「百姓内粟千石、拜爵一級」<sup>(53)</sup>の條は徠民政策思想の延長線上に位置附けることができる。

本文でみたように宗室・貴戚の削弱という政治過程はとりもなおさず、その經濟的基盤たる宗族的共同體が分解し、小農民の自立化が進んでそれらが君主の直接把握對象に轉化したことを示す。しかし他方、霸道政策による侵略によつて得た新領土は秦法の施行による族制の分解を意圖しながらも、結局は徹底化が困難で宗族的共同體を抱えこむために、秦の範圍内に共同體的世界もまた擴大してくる。従つて、天下という「故秦の境域」を越えた領域において二重體制が擴大再

生産されざるをえないのである。故秦の地域に完成しつつある君主の小農民支配を基礎として、君主專政體制を維持し、天下の新領域において宗族的共同體を中心とする王道の支配が行なわれるという意味あいでは、秦國は依然として二重構造的國家であつたと云わねばならない。

# 註

- (1) 中華民國五十四年二月、臺灣・商務印書館刊。
- (2) 同書、第六章、商君書の考證。参照。
- (3) 拙稿「商君書佚民篇釋讀」岡山大學文學部紀要、通卷第四十四號、一九八三年。
- (4) 增淵龍夫『中國古代の社會と國家』第三篇第一章。二七三—二七七頁参照。
- (5) 西嶋定生『中國古代帝國の形成と構造』五〇六—五〇九頁参照。
- (6) (1)の一二二頁、一三〇頁参照。
- (7) 守屋美都雄氏は上爵を下爵(衆爵)に對するものとするが、功の量の多寡によって爵の上下を定める意と解したい。注(3)参照。
- (8) 注(3)参照。
- (9) 渡邊信一郎「分田攷」『中國史像の再構成』所載。一九八三年、文理閣刊。分田觀念の例示として商君書佚民篇と算地篇の該當部分が引用されている。なお注(17)に變法令と商君書を一應區別する見解が提示されている。
- (10) 原文は「今使復之三世。無知軍事。秦四竟之内。陵阪丘

陽。不起十年征。者於律也」であり、者は著字。

- (11) (3)参照。木村英一氏の商君書に對する見解に論評を加えた。木村『法家思想の研究』第三章「法家的思想の發生と法家の先驅者」一九四四年、弘文堂書房刊。

- (12) 板野長八「商鞅の變法を繞る老子と孟子」史學研究一六二號(一九八四年)四二頁に説話をめぐる思想上の問題點が指摘されている。

- (13) 史記商君列傳。

- (14) (4)参照。

- (15) (1)参照。

- (16) 商君書解詁定本、一九五六年、古籍出版社刊。

- (17) 商君書算地篇。

- (18) 朱師轍『商君書解詁定本』注に、禮樂・詩書・孝弟をあげる。去彊篇では、歳・食・美・好・志・行を六蠱とする。

- (19) (4)参照。

- (20) 史記穰侯列傳。

- (21) 同前。

- (22) 范雎は齊の攻撃すなわち應侯の策を批判して親魏方針をとり、そのことを、「今夫れ韓・魏は中國の處にして天下の樞な

り。王それ霸たらんと欲せば必ず中國に親しみ、以て天下の樞たらん。」と霸道に位置附けている。

(23) 史記范雎・蔡澤列傳。

(24) 史記白起・王翳列傳。

(25) 卷五、所載。

(26) 『說苑』卷十に魏安釐王十一年すなわち秦昭王四十一年の記述として次の文章がみえる。

秦昭王謂左右曰、今時韓魏與秦孰強、對曰不如秦強、王曰、今時如耳・魏齊與孟嘗・芒卯孰賢、對曰、不如孟嘗・芒卯之賢、王曰、以孟嘗・芒卯之賢、牽強韓魏以攻秦、猶無秦寡人何也、今以無能如耳・魏齊、而牽弱韓魏以伐秦、其無秦寡人何、亦明矣。左右皆曰、然。申旗伏瑟而對曰、王之料天下過矣。當六晉之時智氏最強、滅范中行氏……今秦雖強不過智氏、韓・魏雖弱尚賢其在晉陽之下也。此方其用肘足之時、願王之必勿易也、於是秦王恐。

とあるのがそれであるが、文中、申旗は范雎系官僚とみなしうる。

(27) 史記范雎・蔡澤列傳。

(28) 史記白起・王翳列傳。

(29) 史記會注考證、白起・王翳列傳注。

(30) 昭王四十八年。

(31) 昭王五十二年。

(32) 中村充一「范雎と王稽」『歴史における民衆と文化』酒井先生古稀祝賀記念論集所載、一九八二年、國書刊行會刊。

(33) 帝業とは西帝を稱したことを指す。史記范雎・蔡澤列傳。

(34) 前引用句は易經の彖傳とりわけ豐傳第六、泰傳第二、咸傳第四との類似がみられる。後引用句は同じく乾の卦の文。

(35) 孟子は老莊によって批判され、儒家の後繼者は天道に妥協する易經を利用して反撃した。蔡澤は君主權の絶對性をみとめる前提で王道を説くものである。(12)四五頁参照。

(36) 『商君書解詁定本』五六頁参照。

(37) 山東大學商君書注釋組、一九七六年、山東人民出版社刊。

(38) 北京電子管廠、北京廣播學院、商君書評注小組、一九七六年、中華書局刊。

(39) 陳啓天著、中華民國二十四年五月、商務印書館刊。

(40) 高亨著、一九七四年、中華書局刊。

(41) 荆實著、一九七五年、中國財政經濟出版社刊。

(42) 史記范雎・蔡澤列傳。

(43) 秦策(一)所載。

(44) 史記商君列傳。

(45) 拙稿「商鞅、分異の法と秦朝權力」、歴史學研究四九四號、参照。

(46) 史記張儀列傳。

(47) 拙著『秦漢帝國史研究』第一章の左右丞相制、参照。

(48) 史記秦本紀、梁玉繩注、参照。

(49) 史記范雎・蔡澤列傳。

(50) 同前。

(51) 『荀子』卷第十一、疆國篇に應侯が相位に就いて荀子が入秦し秦の印象と意見という文章が所載されている。秦は古の民、吏、朝廷の風を保ち治の至りであると評するが、「王者の

功名」を成すに至っていない。儒がない所にその缺陷があるが、儒をとり入れて純粹に實施すれば王となり得、純一でなくとも霸となりうると説いている。應侯の相就任は昭王四十一年、荀子の入秦は同四十二年（『中國歷史大事年表』一九八三年、上海辭書出版社刊）と推定されるから、荀子の入秦は應侯政權の當初であつた。范雎から蔡澤の移行時以降に荀子のいう「駁」が實現していくであらう。

(52) 史記蘇秦列傳參照。

(53) 史記秦始皇本紀。

(54) 『語書』（睡虎地秦墓竹簡）文物出版社）に「古者、民各有鄉俗、其所利及好惡不同、或不便于民、害于邦。」とあり、古は共同體が郷ごとに獨立していた。この楚地を秦が獲得して南郡とし、「今法律令已具矣。而吏民莫用、鄉俗淫失之民不止、是即廢主之明法也」「今法律令已布、聞吏民犯法爲聞私者不止私好、鄉俗之心不變……」。とあるよう法律令を示したが、郷俗は變化せず、君主の明法が徹底しなかったという。

THE FORMATION OF QIN STATE POWER AS SEEN  
FROM THE *LAIMIN* 徠民 AND *SUANDI* 算地  
CHAPTERS OF *THE BOOK OF*  
*LORD SHANG* 商君書

YOSHINAMI Takashi

Most of the chapters comprised in the Book of Lord Shang are believed to have been authored by scholars who inherited the tradition initiated by Shang Yang 商鞅 but lived after his death. The two chapters *Laimin* and *Suandi* were written at about the same time but there is an important difference in the argument they put forward. In the *Laimin* chapter the “minister” 臣 occurring in the text discards Shang Yang’s principle that awards should be bestowed only after merit had been proven and proposes that awards be given in anticipation of future merit. In concrete terms the minister proposes that a “division of labor” be instituted in which the people from the Three Jin kingdoms 三晉 are given awards and made to occupy themselves exclusively with agriculture, whereas the original inhabitants of Qin are employed exclusively with military pursuits. However, the character called “official” 王吏 in the same chapter upholds Shang Yang’s principle of the undivisability of the agricultural and military occupations and the minister and the official are thus in opposition to each other. The “minister” 臣 occurring in the *Suandi* chapter stands for exactly the same policy as the “official” of the *Laimin* chapter. If we examine the position represented by the official of the *Laimin* chapter and the minister of the *Suandi* chapter, we find that it consists in a maintenance of the principles emphasized by Shang Yang concerning the unity of the farming and the warring occupations and the centralised bestowal of awards for clearing land. This policy was proposed to redress the relaxation of Shang Yang’s policies that had occurred within the state of Qin and it is diametrically opposed to the proposal put forward by the minister of the *Laimin* chapter that people from outside of Qin be made to clear land. If we view this opposition in the light of Qin state power, the minister of the *Laimin* chapter can be equated with the group centering around Cai Ze 蔡澤 that came to Qin in 252 B. C. and the official



seems to belong to the tradition of persons as Wei Ran 魏冉 and Fan Sui 范雎.

ON THE SIZE AND COMPOSITION OF THE ARMY  
RECRUITED FOR SUI YANGDI 煬帝'S FIRST  
CAMPAIGN AGAINST KOGURYŎ 高句麗

ASAMI Naoichiro

In the present study of the military system of the Sui dynasty I focus on the army recruited for Sui Yangdi's first campaign against Koguryŏ. The preparations for this military expedition began in 611 and the expedition itself was undertaken in 612. The number of soldiers said to have participated is extremely large, but there are no grounds in the records at our disposal for doubting its correctness. According to several sources at least 800,000 soldiers took part in the campaign. In the expeditionary force were soldiers that had been recruited extraordinarily by the commanderies (*jun* 郡) and prefectures (*xian* 縣). Soldiers as these were the precursors of the so-called *bingmu* 兵募 'draft soldiers' of the first half of the Tang dynasty. They had previously been recruited and commanded by the commanderies, but were now recruited by the commanderies (*zhou* 州, called *jun* in the Daye 大業 period) and led instead by a commandant sent by the central government. The extremely large number of soldiers participating in the Koguryŏ campaign did not comprise militia soldiers (*fubing* 府兵) only; the number was possible because of the great number of draft soldiers incorporated in the expeditionary force.